

飯田市立遠山中学校 – 学有林を中心として、木材や林業について学ぶ活動

南アルプスユネスコエコパークに位置する飯田市立遠山中学校では、学校所有の「学有林」を活用した学びを通じ、地域社会や自然環境への理解を深めています。この学習は、生徒たちが、かつての地域の主要産業であった林業を体験的に学ぶとともに、学びを SDGs の観点で捉え直し、持続可能な社会について考える機会となりました。

活動の概要

学有林学習は 1 年生の時に始まりました。間伐や枝打ちといった森林保育作業を体験し、人工林が健全に成長し、土砂崩れなどの防災効果を持つ仕組みを学びました。この経験を通じて、森林の持つ多面的な機能を理解するとともに、自然環境の保全の重要性に気づきました。

その後、学有林をより有効に活用する方法を検討し始めた生徒たちは、木材の利用や販売に注目しました。生徒たちは木材流通センターを訪れ、木材がどのように加工され、流通していくのかを見学し、木材加工機会を使った椅子づくりを体験しました。この体験により、地域産業の現状や可能性を知るだけでなく、ものづくりの楽しさも実感することができました。

学有林の活用は学内にとどまらず、地域社会にも貢献しています。2 年生の活動として、学有林内に遊歩道「遠山校道」を整備しました。この遊歩道は、地域住民が安全に利用できるだけでなく、学校の環境教育の場としても活用されています。こうした活動を通じ、生徒たちは地域資源を活用する意義を深く理解しました。

さらに、ベンチ制作プロジェクトでは、学有林の木材を使用して地域の公共施設に提供しました。この取り組みは、地域社会との連携を強化し、地元資源の活用が地域にどのような利益をもたらすかを示すものとなっています。

この活動を通じて、遠山中学校では SDGs の視点から学びを深めることの重要性を再認識しました。例えば、間伐や枝打ちの体験は、SDGs 目標 15「陸の豊かさを守ろう」に関連し、森林保全が生物多様性の保護や自然災害の防止につながることを学びました。また、木材利用や加工の学びを通じて、目標 9「産業と技術革新の基盤をつくろう」に対応し、地域産業の現状と未来の可能性について考えを深める機会となりました。さらに、遊歩道整備やベンチ制作を通じて、目標 11「住み続けられるまちづくりを」に関連する活動を実践しました。これらの視点を取り入れた学習は、生徒たちに持続可能な社会づくりの一端を担う実感を与えています。

遠山中学校の生徒たちは学有林を通じて、森林管理や地域資源の活用方法を学ぶだけでなく、自然環境と人々の暮らしを繋ぐ新たな価値を発見することができました。今後は、学有林をさらに豊かに育てる活動を継続するとともに、木材を使った新たなプロジェクトを計画しています。具体的には、学校施設の整備や地域住民と協力した製品作りなど、地域社会への貢献をさらに広げていく予定です。